

あの大战後六十一年、我が国は平和を保つて来ましたが、地球上においては戦争が絶え間なく起っております。

安心、安全、信頼の世界をと念ずるものであり、平和を念ずるものです。

## 私の戦記

新潟県 会 田 政 司

私は大正六（一九一七）年十二月六日、男三人妹二人の五人兄弟の長男として生れました。生家は両親が理髪業を営んでおりましたので、学校を卒業すると父に教わりながら理髪業に従事しておりました。

昭和十四（一九三九）年五月ころ、徴兵検査が実施され、私は第二乙種合格となり、当分入隊はないだろうと思っておりましたところ、翌年の十二月一日、第一乙種に編入となり、第一補充兵として召集令状が来たのでした。

当時は中国大陸での戦線が拡大しつつあって街のあちらこちらの地域からも出征兵士の姿が見られるようになりました。私の街からも三人ほど召集令状が来て、門口には「祝出征」と書かれた旗が立ち、町内は大賑わいの激励の見送りでした。

昭和十五年四月八日、臨時召集にて歩兵第十六連隊の留守部隊に入隊することとなりました。四カ月間の歩兵一般基礎教育を受け、初めての軍隊生活を味わいました。とくに内務班における教育は厳しくありました。ようやく軍隊生活にも馴れて来た七月には召集解除となり帰宅致しました。

その後、名古屋造兵廠に入社して、三八式小銃の銃身を造る仕事に従事していました。昭和十六年七月十六日、第二回の召集令状が来ました。会社の方々の見送りを受けて新潟県は新発田の歩兵第十六連隊に入隊することになりました。いよいよ今度は戦地行きとなり、七月二十三日新発田連隊の営門を出発、一路大阪港へと向いました。

七月二十四日、大阪港を出港、釜山港に上陸、部隊は七月三十一日、朝鮮の会寧に到着し、ここに駐留していた歩兵第七十五連隊の営門を入り、転属となりました。

翌日から付近の警備に就いていましたが、我々はどうも南方戦線行きらしいとの話でした。当時、

南方戦線では各島々の駐留部隊は苦戦を強いられている現状でした。

いよいよ我々の部隊にもフィリピンに派遣という命令が下達され、昭和十九年十二月三日、会寧を出発、釜山港より「青葉丸」という輸送船に乗船、大阪港に到着しました。

ここで海域の輸送情報の確認をして、私達は門司港に移動し、門司港より昭和二十年一月九日、「メルボルン丸」（二万トン級）という船でフィリピンに向って真暗な南シナ海を南下、航行しました。

台湾沖からどのくらい進んだ所だったか、たちまち敵潜水艦に発見され、攻撃を受けました。船団はばらばらになり逃げたのです。我々の船は船首に相当な打撃を受けたのですが航行することは出来たので、逃げ回ること一カ月、食料も無くなり、船酔いなどでふらふらになって、ようやく台湾の高雄港に入港することができました。

あの敵の空襲と潜水艦による攻撃では、「もう

駄目だ」と言つて海に飛び込んだ者もいました。

私も何とか生を得て台湾に上陸し、独立歩兵第四六八大隊に転属となりました。このような戦況のため、我が部隊は目的のフィリピンには行けなかつたのです。

その後、南方の島々は玉碎の悲報が相次ぎ、ついに昭和二十年八月十五日の終戦の日を迎えたのです。中国兵が来て武装解除をされ、その後、捕虜生活となり、昭和二十一年三月二十三日、復員船にて久里浜に上陸、各自に帰省することになりました。

新潟の街並は空襲でやられました、実家は無事でしたので、家族からは喜びいっぱいのお出迎えを受けました。しばらく休養した後、元の理髪業を開業、今日に至っております。現在の平和な六十余年、さらに永久に続けてもらいたいと願っております。

## 両親もいないのに三度も召集

新潟県 平 沢 貞三郎

私は昭和十二（一九三七）年の徴兵検査で第一乙種合格でした。昭和十三年九月十三日、第一回目の召集令状が来ました。令状が配達された時、家の者は山へ仕事に行っており、家には誰もおりませんでした。家族は私への連絡を心配しておりましたが、私には他の者が知らせてくれ、当日家族も駅で私の姿を見て安心したようでした。

当時、私は小学生の時に父親も母親も亡くして、八十歳を越した祖母と小学生の弟二人の四人家族で、私が働いてやつと生活していた状況でしたので、その家族を残して出征することは私には断腸の思いでした。しかし当時としては国家のためとなれば、個人のいかなる理由も通用しない時代でしたので、心を鬼にして入隊しなければならず、親戚はもちろん、知人、友人などの方々には後